

2023 年度環境政策論Ⅱ レポートについて

【提出期間】

家本先生・渡邊先生、森先生、日比先生・山ノ下先生：

12 月 22 日（水）～ 1 月 5 日（金）午前0：00

川村先生：

1月18日（木）～1月26日（金）午前0：00

※間違えて別の先生のレポート課題提出Boxに提出してしまった場合は、0点となります。

【字数制限】

1 問につき 1,500 字以内(表、グラフ、注、参考文献リストなどはこれに換算しない)

【問題数】

4問必須解答

※選択式ではありません。4問すべてに解答して下さい。いずれかの問題に解答しない場合は該当の問題の得点が0点になるので、注意して下さい。

○ 試験場での試験ではなく、レポートで、相当の時間を与えられているのですから、何を参考資料にしてもかまいませんが、自分で考えたことが分かる論述を展開し、＜これで合格するだろう＞程度のレベルではなく、自分で書けるベストの論述を提出してください。いわゆる＜copy and paste＞は厳禁です。引用には出典を明記してください。必要なら、多少の表、グラフ等を挿入してもかまいません。そのさい、これらは字数に含まれません。

2023（令和 5）年度 環境政策論 II 学期末試験
レポート課題 講師名：家元了誌・渡邊潤

UAE・ドバイにて 2023 年 11 月 30 日～12 月 12 日にかけて開催された国連気候変動枠組条約第 28 回締約国会議（COP28）では、パリ協定で定めた各目標に対する進捗状況を評価する「第 1 回グローバルストックテイク」が実施されました。グローバルストックテイクでは、各国によるパリ協定の目標へ向けた取組状況が評価され、目標達成のための取組の加速が求められ、化石燃料からの脱却、再生可能エネルギー容量やエネルギー効率改善率の引き上げ等が決定されました。

パリ協定（2015 年採択、翌 2016 年発効）で合意された目標の概要とその科学的な根拠および目標達成のためのパリ協定の仕組みについて、下記の 3 つのキーワードを用いて論じると共に、パリ協定が定める目標達成に向けて日本政府がとるべき取組について、自身の考えを述べなさい。

キーワード：「IPCC」、「1.5 度目標」、「各国の排出削減目標（NDC）」

文字数目安：パリ協定の目標と実施の仕組み：500 字以上、1,000 字以内
日本政府の目標達成に向けた取組：500 字以内

2023（令和5）年度 環境政策論Ⅱ 学期末試験

レポート課題 講師名：森高一

「サステナブルな観光について、それが今日求められる理由や経緯とともに、あなたが大事だと思うことを、具体的な事例やトピックスを1つ以上入れて論じなさい」

2023(令和5)年度 環境政策論Ⅱ 学期末試験
レポート課題 講師名: 日比保史・山ノ下麻木乃

課題:

課題文(日経 ESG 記事、詳細下記)を読み、あなたの意見を述べてください。
その際、12 月 7 日講義(日比担当)と 12 月 14 日講義(山ノ下担当)の内容を踏まえ、森林と気候変動(カーボン)、生物多様性・地域コミュニティへの貢献を含めた生態系サービスの観点を含めて論じてください。

課題文:

日経 ESG 記事「アップルの「炭素中立」主張に批判 EU は表現禁止、環境団体からは疑問噴出」

<https://project.nikkeibp.co.jp/ESG/atcl/column/00005/112900409/?P=2>

(アクセスできない場合は、添付の pdf を参照してください。)

2023（令和 5）年度 環境政策論 II 学期末試験

レポート課題 講師名：川村研治

生成 AI を使って、環境 NGO の役割を、重要性が高い順に 1～3 位まで列挙させました。ChatGPT は、1 位：環境問題の理解促進、2 位：環境保全活動の実践と参加促進、3 位：人権擁護と政策提言、の順になりました。一方、Bard は、1 位：環境問題の理解促進、2 位：人権擁護と政策提言、3 位：マルチステークホルダーパートナーシップの形成、の順になりました。2 つの生成 AI は、講義を聴いていないためにこのような順位になったと考えられます。講義を踏まえた、あなたの考える順位を 1～3 位まで挙げて、その順にした理由を書いてください。なお、環境 NGO の役割は、講義の中で述べた 5 つの機能から選んでください。

【環境 NGO の 5 つの機能】

「人権擁護と政策提言」、「調査・研究」、「環境問題の理解促進」、「環境保全活動の実践と参加促進」、「マルチステークホルダーパートナーシップの形成」

2023 年度環境政策論Ⅱ 期末レポート講評（家本了誌・渡辺潤）

前半：パリ協定の概要、科学的根拠、目標達成のための仕組み

- ・全ての学生がキーワード（「IPCC」、「1.5 度目標」、「各国の排出削減目標（NDC）」）を用いてレポートを作成していた。
- ・2 度目標では将来の気候危機回避が難しくなることが、科学的見地（IPCC1.5 度特別報告書）から明らかとなりつつあり、1.5 度目標に向けての取組が求められている。
- ・パリ協定の目標達成に向け、各国は自国の排出削減目標（NDC）を策定・提出し、5 年ごとのレビュー・更新によって、野心を引き上げる仕組みが設けられている。また、パリ協定の進捗状況を 5 年ごとに確認するグローバル・ストックテイクも野心引き上げメカニズムの構成要素で、世界各国全体の取組を強化していく仕組みとなっている。
- ・さらにパリ協定 6 条（市場メカニズム）や京都議定書との違い等、パリ協定の概要をより詳細に記述したものには加点した。

後半：日本政府がとるべき取組についての自身の考え

- ・「自身の考え」を記述する課題であったので、日本の気候変動対策や取組に関する記述であれば、再生可能エネルギー、電気・水素自動車、森林保全・植林、技術革新・研究開発、二国間クレジット制度（JCM）、NGO 支援、環境教育、他、どのような取組であっても可。
- ・単に「目標達成のため〇〇すべき」の表記のみならず、論理的に、なぜその対策・取組を行うべきか、（他の手法に比べて）効果的か、といった論理的な記述には加点した。
- ・一方で、自身の考えが記載されず、日本政府の取組のみを記述したものは減点とした。

また、誤字や脱字が目立つレポートは減点対象とした。また、意味が通らない不完全な文章となっているものも減点とした。レポート提出時に改めて自身が作成した文章を読み返す等して、チェックして頂きたい。

2023 年度環境政策論Ⅱ 期末レポート講評（森高一）

今回の課題に対し、サステナブルツーリズムをオーバーツーリズムの対策としてとらえる論じ方が多かった。それも一面ではあるが、授業で話した地域の経済的、社会的、環境的な持続性なくして観光も持続しない点、また世界でもはや常識となっている地球規模のサステナビリティへの認識が、多くのレポートで薄いと言わざるを得ない。

事例を上げてという設定についても、情報源としてウェブ上の AI による情報をもとにしていくものが多い印象で、国内観光地の取り上げが多く世界的視野にかけていた。日本で言われるサステナブルツーリズムの言葉の解説になってしまった感が強い。

授業時に語ったサステナブルツーリズムが今世界的に注目される本質的なところ、地域の持続性と地球の持続性双方の視点からとらえることを理解いただきたい。本講への出席とそこで受けた問題意識からの論考を期待する。

2023 年度環境政策論Ⅱ 期末レポート講評（山ノ下麻木乃）

レポートの課題は、日経 ESG 記事を読み、講義で得た知識を使って、現在実際に社会で起きている問題を自分で考えてもらうことが目的でした。

カーボンクレジットは適切に活用すれば、私たちから遠く離れた森林保全に貢献する優れたツールでしょう。しかし、その使い方は十分注意する必要があります。大きな問題の1つは、カーボンのみに注目した場合です。「とにかく木を植えて大量の炭素を吸収させる」ことのみに着目すると、気候変動の緩和には効果的かもしれませんが、他の問題を生じさせることになります。極端な例ですが、「アフリカの天然の草原に成長量が大きな樹木を植林したほうが良い」という判断をしてしまうことになります。そのため、同時に生物多様性、生態系サービス、その地域に住む人々の生活という観点を常に同時に考え、シナジーを生む方法を検討する必要があります。森林カーボンクレジットがどのような活動から創出されたものなのかについて考慮することが必要になります。もう1つの問題は、カーボンクレジットを購入したことで、自分が引き起こした排出はなかったことになり（オフセット）、これ以上の排出削減努力は不要と考えることです。20年ほど前、気候変動問題が今ほど深刻でないと考えられた時代には、化石燃料使用による排出は森林のCO₂吸収で補うことができるとみなされる傾向がありました。しかし、講義でお話したように、現在では化石燃料使用も森林保全も同時に進めていかないと気候変動問題に対処できないことが科学的に示されています。アップル社は自社の排出削減努力に加えて森林カーボンクレジットを購入しているという点では素晴らしいです。しかし、カーボンクレジットを使用したオフセットによるカーボンニュートラル（炭素中立）製品としてしまうと、自社の排出削減努力と同時に消費者の排出削減努力の妨げになるリスクがあります。

最近では気候変動対策として排出削減に取り組む企業が増えています。アップル社はエネルギー使用からの排出削減努力に加えて、自然（森林）を活用する排出削減に積極的に取り組んでいることについては高く評価できる先進的な企業と言えるでしょう。しかし、記事でも指摘されているように、より詳細に目を向けると、疑問点や改善の余地のある部分があります。東京のような都市を拠点に活動する私たちは、普段森林に直接的に関係することは少ないですが、無関係ではありません。課題文のようなアップルウォッチを通じて、普段飲んでいるコーヒーを通じて森林の問題に関わっています。今回講義をきっかけに受講生の皆さんが、そのような点に自ら気づき考えて判断することにつなげていただければと思います。

2023 年度環境政策論Ⅱ

【期末レポート講評】川村研治

課題 4 は環境 NGO の役割について出題した。課題 4 のレポート提出数は 78 人、平均は 65 点、60～69 点が 16 人、70～79 点が 14 人、80～89 人が 10 人、90～100 点が 5 人であった。なお、点数は百点満点に換算したものである。

100 人いれば 100 通りの答えかたのできる課題である。与えられたテーマを「自分ごととして捉えることができたか」が点数の差となって現れたように思われる。授業の感想文を読むと、授業で話した内容を自分の問題として自問しようとしているものがあり、レポートにもその姿勢が反映しているように思われる。

持続可能性にかかわる諸課題にも唯一絶対の正解はない。私たち一人ひとりが正面から課題と向き合い、葛藤を繰り返しながら解決していくしか道はない。自問自答・実践と振り返りを繰り返しながら「正解」を目指していかなければならない。これからも学びと行動を続け、よき未来を生み出す力を育ててほしいと切に願う。